# The indefinite-personal constructions in Icelandic and Faroese


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-05-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Irie, Koji<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24517/00053973 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇
第 11 号　2019 年　79～94

# アイスランド語とフェーロー語の不定人称文

入　江　浩　司

## 1. はじめに*

本稿の目的は、現代アイスランド語とフェーロー語 [1] の不定人称文のうち、フランス語 *on* やドイツ語 *man* に相当する不定代名詞およびそれに準ずる名詞類を用いて構成される文の概要を示すことである。今後予定している他言語との対照研究の材料とするという目的もあるため、用例収集においてサンテグジュペリ『星の王子さま』(*Le petit prince*) のアイスランド語訳とフェーロー語訳を使用し、フランス語原文で代名詞 *on* を主語として構成されている不定人称文の翻訳箇所を主な分析対象とする。データの分類・整理においては、ヨーロッパの諸言語の研究に基づく Gast & van der Auwera (2013) で提案されている不定人称文の分類と意味地図を利用する。

本稿の構成は次の通りである。まず第 2 節で、本研究で主として参照した先行研究 3 点の概要を述べる。続く第 3 節で Gast & van der Auwera (2013) の分類に沿ってアイスランド語とフェーロー語のデータを示す。そして第 4 節でアイスランド語とフェーロー語の不定人称代名詞類の用法の広がりを Gast & van der Auwera (2013) の提案する意味地図上に示して考察を行う。第 5 節でまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 先行研究

ヨーロッパの言語では、フランス語の *on* やドイツ語の *man* のように、人間を表す不定代名詞（Gast & van der Auwera 2013 の用語では 'human impersonal pronoun'）を用いて構成される不定人称文がしばしば用いられる。本稿で主として参照する Gast & van der Auwera (2013) は、impersonalization（本稿では「不定人称化」と呼ぶ）を次のように定義している。

(1) IMPERSONALIZATION is the process of filling an argument position of a predicate with a variable ranging over sets of human participants without establishing a referential link to any entity from the universe of discourse.

Gast & van der Auwera (2013: 124)

不定人称化の主要な方略としては、ドイツ語の *man* に代表される「人」を表す名詞に起源をもつ不定代名詞（本稿で「*man* 名詞類」と呼ぶ）を用いる構文 (*man*-construction) に

よるものと、3 人称複数（代名詞または動詞の標識）によるものがある。Gast & van der Auwera (2013) は、*man*-constructions を主として論じた Giacalone Ramat & Sansò (2007) の示す *man* 名詞類の機能的発展（文法化）の方向性と、Siewierska & Papastathi (2011) の 3 人称複数による不定人称化の意味地図を統合したものとして、円環状の意味地図を提案している（(7) 参照）。ここでこれらの先行研究の概要を述べておく。なお、不定人称化には非人称受動文を用いるなどの方略もあるが [2]、Gast & van der Auwera (2013) では代名詞を用いた方略を主として扱っており、本稿もこれに合わせて不定代名詞（および不定代名詞的名詞類）を用いて構成される文を扱う。

### 2.1. Giacalone Ramat & Sansò (2007)

Giacalone Ramat & Sansò (2007) による、*man* 名詞類の文法化の方向性というのは次のようなものである。

(2) (a) species-generic
→ (b) human non-referential indefinite
→ (c) human rererential indefinite
→ (d) human referential definite
(Giacalone Ramat & Sansò 2007 に基づく Gast & van der Auwera 2013: 125 による)

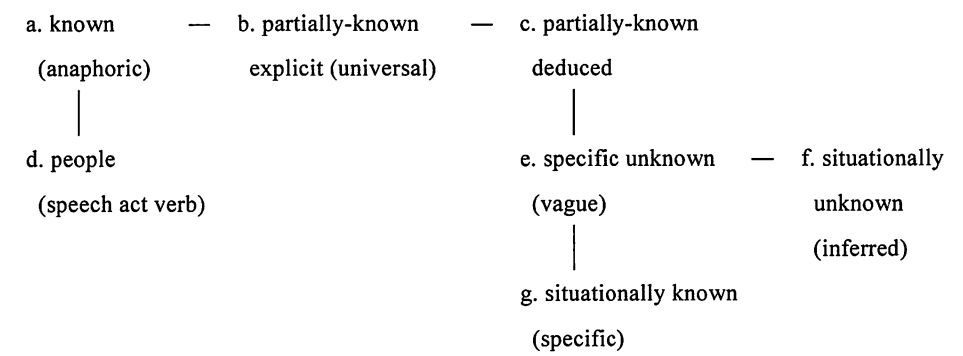
(a) species-generic というのは *Man does not live by bread alone* というような人間一般について述べる文で *man* 名詞類が用いられる場合である。(b) は事実性の低い文で、描写される事態に関与する特定の人の存在が含意されない場合であり、Gast & van der Auwera (2013) の Nodes 6-7 に相当する（(6) 参照）。(c) は事実性の高い文で、描写される事態に関与する特定の人の存在が含意される場合であり、Gast & van der Auwera (2013) の Nodes 1-2 に相当する（(6) 参照）。(d) はフランス語の不定代名詞 *on* が文脈上、明らかに 1 人称複数の主体を指示するような場合である。なお、Giacalone Ramat & Sansò (2007) は、(c) と (d) は (b) から平行的に発展するもので、(c) を前提として (d) が生じるのではないとしている [3]。Gast & van der Auwera (2013) の提案する意味地図においては、(a) と (d) は考慮の外に置かれている。

### 2.2. Siewierska & Papastathi (2011)

Siewierska & Papastathi (2011) は、3 人称複数による不定人称化の意味地図として (3) のような図を提示している。a は先行文脈の名詞に照応する通常の代名詞の用法であり（これを不定人称化の出発点とする）、d は *They say that he was a drinker* のように発話行為を表す動詞の主語として用いられるもので、これら二つは Gast & van der Auwera (2013) では考慮の外に置かれている。b は Gast & van der Auwera (2013) の Node 4 に、c は Node 3 にそれ

ぞれ相当するものである（(6) 参照）。e は *They've found his bike in the back of a barn* のように、事態に関与した人の存在は確かだが具体的には知られていない（ないし重要でない）場合である。f は *They've been frying chips here* のように、描写される事態が生じたことが状況から推論される場合である。g は *They're knocking on the door* のように、単数または複数の動作主が物理的に存在し、それを確認するのも可能な状況にある場合である。なお、Gast & van der Auwera (2013) の意味地図では e, f, g 相互の区別はされず、いずれも Node 1 もしくは Node 2 に該当するものとして扱われている。

(3)

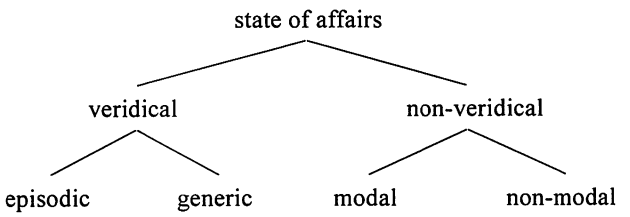



(Siewierska & Papastathi 2011: 604 に基づく Gast & van der Auwera 2013: 127 による)

## 2.3. Gast & van der Auwera (2013)

Gast & van der Auwera (2013) は不定人称文の分類にあたって、事態を (4) のように分類する。まず、事実性の高い事態 (veridical) と事実性の低い事態 (non-veridical) に区分され、事実性の高い事態は、特定の場所と時間で生じた事態 (episodic) と、場所と時間の限定のない一般的な事態 (generic) に区分される。事実性の低い事態は、可能性や必然性などモーダルな要素をもつもの (modal) と、そのような要素をもたないもの (non-modal) に区分される。ただし、終端節点は相互排除的ではなく、'generic' な文が 'modal' であったり 'non-modal' であることもあるが、ヨーロッパの諸言語の人を表す不定人称代名詞の分布を説明する上では、そこまで細分する必要はないだろうと述べている (Gast & van der Auwera 2013: 138)。

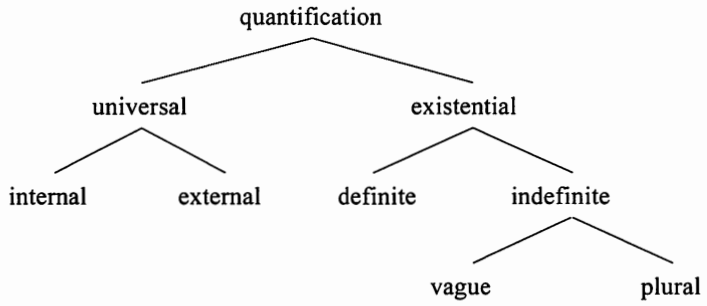
(4)




(Gast & van der Auwera 2013: 138)

次に Gast & van der Auwera (2013) は不定人称文を分類する二つ目のパラメーターとして量化の種類について (5) のような分類をしている。まず全称的 (universal) なものと存在的 (existential) なものに分類される。全称的なものは、話し手ないし聞き手を含む視点のもの (internal) と、話し手や聞き手を除外する視点のもの (external) に区分される。存在的なものは、指示対象が状況から特定できるもの (definite) とできないもの (indefinite) に区分される。特定できないものについては、数の上で単数か複数かあいまいなもの (vague) と、明らかに複数であるもの (plural) に区分される。

(5)




(Gast & van der Auwera 2013: 140)

そして (4) と (5) の分類を組み合わせることにより、Giacalone Ramat & Sansò (2007) と Siewierska & Papastathi (2011) の意味地図（(2) と (3)）を円環状の意味地図に統合することができるとしている。Gast & van der Auwera (2013) の提案する意味地図 (7) 上のそれぞれの Node に該当する英語およびドイツ語の例文を、その素性とともに (6) に引用しておく。'S' は 'sentence' を表し、(4) の分類を反映するものである。'HP' は 'human participant' を表し、(5) の分類を反映するものである（Gast & van der Auwera 2013: 140）。

(6) a. Node 1 (S: veridical/episodic, HP: existential/indefinite/vague)

英 ***They're** knocking on the door.* 独 ***Man** klopft an der Tür.*

b. Node 2 (S: veridical/episodic, HP: existential/indefinite/plural)

英 ***They've** surrounded us.* 独 ***Man** hat uns umstellt.*

c. Node 3 (S: veridical/episodic, HP: existential/definite)

英 ***They've** raised the taxes again.* 独 ***Man** hat schon wieder die Steuern erhöht.*

d. Node 4 (S: veridical/generic, HP: universal, external)

英 ***They** eat dragonflies in Bali.* 独 *In Bali isst **man** Libellen.*

e. Node 5 (S: veridical/generic, HP: universal, internal)

英 ***One** only lives once.* 独 ***Man** lebt nur einmal.*

f. Node 6　(S: non-veridical/modal, HP: universal, internal)

英 ***One*** *should never give up.*　　独 ***Man*** *sollte nie aufgeben.*

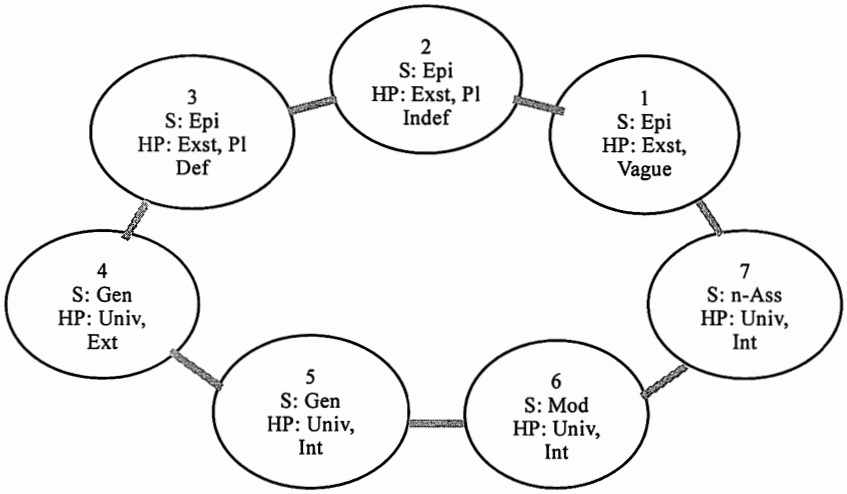
g. Node 7　(S: non-veridical/non-modal (= non-assertive), HP: universal, internal)

英 *What happens if* ***one*** *drinks sour milk?*　独 *Was passiert, wenn* ***man*** *saure Milch trinkt?*

(Gast & van der Auwera 2013: 140-141, 143-144)

(7) は Gast & van der Auwera (2013) の提案する意味地図である。なお、原著で各節点の円内と節点同士を結ぶ線につけられている陰影は、本稿では印刷の都合上、省略する。

(7) 人を表す不定人称代名詞の意味地図




(Gast & van der Auwera 2013: 141)

(7) の意味地図は、隣接する Node 同士が素性一つないし二つを異にしながら推移して円環を成すように構成されている。また、この意味地図は二次元的に構成されており、上の部分（Nodes 1-3）は存在量化的で、下の部分（Nodes 4-7）は全称量化的であり、水平方向では右から左に推移するに従い特定性 (specificity) が増大するとされる (Gast & van der Auwera 2013: 141-142)。なお、Node 1 と Node 7 の間は一見すると素性の断絶が大きいが、この隣接関係について Gast & van der Auwera (2013: 153-154) は、不定名詞句の量化の解釈が文脈の種類によって規則的に変異すること、例えば *If a student fails an exam, he is disappointed* のように条件文の前提節に不定名詞句が現れると全称的な解釈になり、*Every student who fails an exam is disappointed* と同義になるといったことから Node 7 と Node 1 は表裏の関係にあり、人を表す不定人称代名詞が条件文の前提節に現れる場合、不定名詞句と同様の解釈を受けると説明している。具体的な例としては、存在量化子として機能する英語 *someone* やドイツ語 *jemand* は Node 1 と Node 7 のみをカバーするとされる (Gast & van der Auwera 2013: 147-149)。

## 3. アイスランド語とフェーロー語の例

この節でアイスランド語とフェーロー語の例を提示する。『星の王子さま』の翻訳としてアイスランド語は Þórarinn Björnsson 訳 *Litli prinsinn* (2017 [1961])（略号 'IS'）、フェーロー語は Alexandur Kristiansen 訳 *Tann lítli prinsurin* (2015)（略号 'FO'）を使用した。それぞれの例につきフランス語の原文と日本語訳を付す。フランス語原文は小島 (2006) および Saint-Exupéry (1971) を参照し、後者のページ番号を記す（略号 'FR'）。日本語訳は逐語的な翻訳の小島 (2006) を引用し、そのページ番号を記す（略号 'JA'）。アイスランド語、フェーロー語、フランス語の問題となる不定代名詞類には下線を引いて示す。日本語の「人」などによる方略も興味深い研究対象ではあるが、本稿では日本語は考察の対象から外す。

フランス語原文で *on* を主語とする文（72 例）が、アイスランド語とフェーロー語でどのような手段で翻訳されているか、大まかな傾向を示すものとして、(8) の表を掲げておく。なお、アイスランド語とフェーロー語の非人称構文とは、明示的な主語を持たず、動詞が 3 人称単数形で現れているものを指す。フランス語 *on* は非常に広い範囲の用法をもち（Nodes 1-7 のすべてが可能）、(8) の表に挙げるアイスランド語・フェーロー語の表現がフランス語原文で *on* を主語とするのではない文の翻訳として現れている場合は少なく [4]、また以下に示す用法以外のものもないため、本稿ではそうした例は含めない。

(8) フランス語 *on* による文のアイスランド語訳とフェーロー語訳の内訳

| アイスランド語訳 | 例の数 |
|---|---|
| *maður*「人」（単数形） | 25 |
| *menn*「人」（複数形） | 13 |
| *ég* 「私」（代） | 1 |
| *við* 「私たち」（代） | 3 |
| *allir* 「みんな」 | 1 |
| *enginn* 「誰も～ない」 | 2 |
| 非人称構文 | 15 |
| その他 | 12 |
| 合計 | 72 |

（代 = 人称代名詞）

| フェーロー語訳 | 例の数 |
|---|---|
| *man*「人」（不変化詞） | 7 |
| *menn*「人」（複数形） | 1 |
| *eg* 「私」（代） | 1 |
| *tú* 「あなた」（代） | 22 |
| *vit* 「私たち」（代） | 1 |
| *ein* 「一人」 | 12 |
| *eingin*「誰も～ない」 | 3 |
| *fólk* 「人々」 | 1 |
| 非人称構文 | 11 |
| その他 | 13 |
| 合計 | 72 |

(8) に挙げたもののうち、ある程度の数のあるものを本稿では取り上げ、例示していく。アイスランド語では *maður* と *menn* を取り上げる。フェーロー語では *man, tú, ein* を取り上げる。なお、フェーロー語 *menn* は 1 例しかないが、最後に参考として言及しておく。

例示に入る前に、それぞれの名詞類の形態・統語的特性に触れておく。アイスランド語の *maður* は「人、男、夫」を表す普通名詞としても用いられ、単数形では主格 *maður*, 対格 *mann*, 与格 *manni*, 属格 *manns*、複数形では主格 *menn*, 対格 *menn*, 与格 *mönnum*, 属格 *manna* のように形態変化をする。例 (9) には 3 つの不定人称的用法の *maður* が含まれている。一つ目は先行する名詞を修飾する属格成分として、二つ目は非人称動詞に対する与格の主語として、三つ目は補文中の主語として主格で表れている。形態の上では主格以外の格形でも現れ、統語機能では主語以外の位置においても現れることがわかる。また、照応では *maður* を繰り返し、人称代名詞に置き換えることができないことがわかる。

(9) *Það verður mikil hnignun á sjálfsvirðingu <u>manns</u> við að vera á*
それ なる.PRS.3SG 大きな 衰退 上の 自尊心 人.SG.GEN 際して こと ある 上に
*götunni. <u>Manni</u> finnst <u>maður</u> vera í vonlausri stöðu og [...]*
街路 人.SG.DAT 思われる.PRS.3SG 人.SG.NOM ある 中に 希望のない 状況 そして
「路上に出るということは自分の自尊心を大きく傷つけることになります。自分は絶望的な状況にあり、[...] と思うようになります。」

(Morgunblaðið[5], 2008 年 6 月 25 日)

不定人称的用法の複数形 *menn* も斜格で現れることができるが、前方照応を行う場合、例 (10) の 2 文目の後半が示すように、人称代名詞に置き換えられる (*menn* の与格 *mönnum* ではなく、男性複数の人称代名詞 *þeir* の与格 *þeim* になる)。

(10) [IS 74] - *Og hvaða gera <u>menn</u> við þessar fimmtíu og þrjár mínútur?*
そして どのようなことする 人.PL.NOM で それら 50 と 3 分
- *<u>Menn</u> gera við þær það sem <u>þeim</u> sýnist.*
人.PL.NOM する.PRS.3PL で それら それ 関係詞 彼ら.PL.DAT よく思われる.3sg
[FR 68] - *Et que fait-<u>on</u> des cinquante-trois minutes?*
- *<u>On</u> fait ce que l'<u>on</u> veut...*
[JA 144]「では、その五十三分をどうするの」 「したいことをするのさ……」

フェーロー語の諸形についてはここで例示しないが、主格以外の形をとるかどうか、前方照応の際に繰り返しになるか人称代名詞に置き換えられるかという点について、アイスランド語とあわせて (11) にまとめておく。なお、フェーロー語の *man*「人」は不変化詞で主語の位置にしか現れず[6]、その一方で格変化をする普通名詞の *maður*「人、男、夫」も存在するが、後者の不定人称的な用法は見られなかった (ただし、その複数形が *menn* である)。フェーロー語の *ein* の照応における繰り返しについては例 (29) を参照されたい。

(11)

| | | 主格（主語）以外 | 前方照応の語形 |
|---|---|---|---|
| アイスランド語 | *maður*「人」（単数形） | あり | 繰り返し |
| | *menn*「人」（複数形） | あり | 人称代名詞 |
| フェーロー語 | *man*「人」（不変化詞） | なし | 繰り返し |
| | *tú*「あなた」（代） | あり | 繰り返し |
| | *ein*「一人」 | あり | 繰り返し |
| | *menn*「人」（複数形） | あり | 人称代名詞 |

以下、Gast & van der Auwera (2013) による (7) の意味地図へのマッピングを前提とした分類 (6) に従ってそれぞれの語の用例を整理して示す。なお、翻訳者の解釈にもより、フランス語原文の *on* と翻訳に現れる名詞類の分類が常に一致するわけではないが、ここでは両者が一致するもので例示を行う。

### 3.1. アイスランド語 *maður*「人」（単数形）

Nodes 1-4 に該当する用法は見られなかった。Node 5 に該当する用例としては、次のようなものがあった。

(12) [IS 67] *Maður* *þekkir* *ekki annað en* *það sem* *maður temur,* *[...]*
人.SG.NOM 知る.PRS.3SG ない ほか より それ 関係詞 人 飼いならす.PRS.3SG
[FR 62] *On ne connaît que les choses que l'on apprivoise, [...]*
[JA 131] ものごとは、飼いならして初めて知ることができるんだよ [...]

Node 6 に該当する用例は『星の王子さま』の翻訳では見られなかったが、例 (13) の新聞記事からの引用のように、日常的なアイスランド語で容易に見出すことができる。

(13) *[...] en* *maður* *skal* *ekki fara út* *í* *neinar* *öfgar.*
でも 人.SG.NOM すべき.PRS.3SG ない 行く 外へ 中へ いかなる 極端さ
「でも人は決して極端なことをすべきでありません。」 (Vísir[7], 2016 年 3 月 10 日)

次は Node 7 に該当する用例である。

(14) [IS 18] *Þegar* *maður* *vill* *fá* *kind sannar* *það* *að*
とき 人.SG.NOM 欲する.PRS.3SG 得る 羊 証明する.PRS.3SG それ こと
*maður* *er* *til*
人 存在する
[FR 12] *Quand on veut un mouton, c'est la preuve qu'on existe*
[JA 30] 人が羊を欲しがれば、その人が存在している証拠になる

### 3.2. アイスランド語 *menn*「人」(複数形)

筆者が参照した先行研究では、アイスランド語の *menn* を不定代名詞の考察の中に含むものはなかったが、本稿では *menn* を不定代名詞的な用法をもつものとして取り上げる。Nodes 1-2 に該当する用例は見当たらず、Nodes 3-7 の例が見つかった。Node 3 に該当する用例としては次の 1 例があった。

(15) [IS 16] *Ég vissi vel að auk stóru reikistjarnanna,*
私 知っている.PST.1SG よく こと の他に 大きい 惑星.DEF
*Jarðarinnar, Júpíters, Mars og Venusar, sem menn höfðu*
地球.DEF 木星 火星 そして 金星 関係詞 人々.NOM 持つ.PST.3PL
*gefið nöfn, voru hundruð annarra stjarna, [...]*
与える.PSTPT 名前 ある.PST.3PL 百.PL 他の 星
[FR 9] *Je savais bien qu'en dehors des grosses planètes comme la Terre, Jupiter, Mars, Vénus, auxquelles on a donné des noms, il y en a des centaines d'autres [...]*
[JA 27] 地球とか木星とか火星とか金星とかのように、名前のついている大きな惑星のほかに何百という星があって、[...] ということを、よく知っていた。

Node 4 に該当する用例としては次のものがあった。

(16) [IS 18] *Því að ég vil ekki að menn lesi bókina*
なぜなら 私 欲する.PRS.1SG ない こと 人々.NOM 読む.SBJV.3PL 本.DEF
*mína með léttúð.*
私の と共に 軽い気持ち
[FR 12] *Car je n'aime pas qu'on lise mon livre à la légère.*
[JA 33] なぜなら、ぼくはこの本を軽々しく読んでもらいたくないから。

なお、(16) では *menn* が従属節内で接続法の動詞の主語として現れており、'veridical' な文とは言えないかもしれないが、2.3 でも触れたように終端節点は相互排除的ではなく、'generic' な文が 'modal' であったり 'non-modal' であることもあるとされ、ここでは (16) を 'generic' かつ 'external' である特性を重視して Node 4 に該当すると考える。念のため、Node 4 に該当する *menn* の現れる 'veridical' な文を次の新聞記事の例で補っておく。

(17) *En í Noregi verða menn að fá aðgangsorð sem*
だが で ノルウェー せねばならない.PRS.3PL 人々 こと 入手する パスワード 関係詞
*þeir stimpla inn þegar þeir fara á spilavefina.*
彼ら 刻印する.PRS.3PL 中へ 時に 彼ら 行く.PRS.3PL 上に ギャンブルサイト.DEF
(アイスランドにいる話し手がアイスランドとノルウェーの状況と対比して)「しかしノルウェーでは、カジノサイトに入る時に入力するパスワードを入手しなければならな

い。」 (Morgunblaðið, 2006 年 10 月 5 日)

Node 5 に該当する用例としては次のものがある。

(18) [IS 74] *Menn* *gleypa* *eina* *á* *viku* *og* *finna* *ekki*
人々.NOM 飲み込む.PRS.3PL 一つ 上に 週 そして 見出す.PRS.3PL ない
*framar* *til* *þess* *að* *þeir* *þurfi* *að* *drekka.*
それ以上 へ それ こと 彼ら.NOM 必要とする. SBJV.3PL こと 飲む
[FR 67] *On en avale une par semaine et l'on n'éprouve plus le besoin de boire.*
[JA 145] [丸薬を] 一週間につき一錠飲むと、もう水を飲みたいとは思わなくなる。

Node 6 に確実に該当すると考えられる用例は『星の王子さま』の翻訳には見られなかったので、次の新聞記事の例で補っておく。

(19) *Menn* *eiga* *ekki* *að* *horfa* *lengi* *á* *sólina* *[...]*
人々.NOM すべき.PRS.3PL ない こと 見る 長く 上に 太陽.DEF
「太陽を長く見つめてはなりません [...]」 (Morgunblaðið, 2003 年 5 月 27 日)

Node 7 に該当する用例としては次のものがある。

(20) [IS 57] *Þegar* *menn* *vilja* *vera* *andríkir* *kemur* *fyrir* *að* *þeir*
とき 人々.NOM 欲する.PRS.3PL である 発想豊かな 出来する こと 彼ら.NOM
*segi* *smávegis* *ósatt.*
言う.SBJV.3PL 少し 本当でない
[FR 50] *Quand on veut faire de l'esprit, il arrive que l'on mente un peu.*
[JA 109] 才気をひけらかそうとすると、人はちょっとばかし嘘をつくことがある。

### 3.3. フェーロー語 *man*「人」(不変化詞)

*man* は不変化詞で、主語の位置にしか現れない。Nodes 5-7 に該当する用例が見られた。次は Node 5 に該当する例。

(21) [FO 68] *Man* *er* *ongantíð* *nøgdur*, *har* *sum* *man* *er*, *[...]*
人 である.PRS.3SG 決してない 満足した そこ 関係詞 人 いる.PRS.3SG
[FR 66] *On n'est jamais content là où on est, [...]*
[JA143] 誰だって自分のいるところには決して満足しないよ」

Node 6 に該当する例は『星の王子さま』の翻訳には見られれなかったため、文法書から補っておく。なお、ここに現れている *mann* は表記上の変異で、*man* に同じ。

(22) *Mann skal halda tað, sum mann lovar.*
人 すべき.PRS.3SG 保つ それ 関係詞 人 約束する.PRS.3SG
「人は約束したことを守るべきだ。」 (Petersen & Adams 2009: 162)

次は Node 7 に該当する例である。

(23) [FO 22] *Tí... tá ið man... er rættiliga sorgarbundin, so*
なぜなら ときに 人 である.PRS.3SG 本当に 悲しい そのとき
*hjálpir tað so væl at sita og hyggja at sólini,*
助ける.PRS.3SG それ とても よく こと 座る そして 見つめる 方を 太陽.DEF
*tá ið hon fer niður.*
ときに それ 行く 下に
「だって……人が……本当に悲しいときは、太陽が沈むときに座って太陽を眺めるのがとても慰めになるでしょう。」
[FR 19] *Tu sais... quand on est tellement triste on aime les couchers de soleil...*
[JA 47] ねえ……ひどく悲しいときには、日の入りが好きになるものでしょう……

### 3.4. フェーロー語 *tú*「あなた」(人称代名詞)

Nodes 5-7 に該当する用例が見られた。まずは Node 5 に該当する例である。

(24) [FO 63] *Tú lærir bert tað at kenna, sum tú temur, [...]*
あなた できる.PRS.2SG だけ それ こと 知る 関係詞 あなた 飼いならす.PRS.2SG
「人は自分が飼いならしていることだけを知ることができるんだ [...]」((12) 参照)

Node 6 に該当する例は『星の王子さま』の翻訳に見当たらなかったため、ニュース記事から補っておく。

(25) *Tú skalt hava arbeiðsloyvi til at arbeiða á føroyskum skipi.*
あなた.NOM べき.PRS.2SG もつ 労働許可 ために こと 働く 上で フェーローの 船
「フェーロー諸島の船で働くには労働許可を得なければなりません。」
(Føroyski portalurin[8], 2014 年 3 月 7 日)

次は Node 7 に該当する例である。

(26) [FO 53] *Tá ið tú vilt vera andborin, hendir tað seg,*
とき あなた.NOM 欲する.PRS.2SG である 物知りの 生じる それ 自らを
*at tú kemur at lúgva eitt sindur.*
こと あなた 行く.PRS.2SG へ 嘘をつく 少し
「人は物知りでありたいと思うとき、少し嘘をつくようになる。」((20) 参照)

### 3.5. フェーロー語 *ein*「一人」

フェーロー語の *ein* は数詞「一」に由来し、同形で不定冠詞としても用いられる（アイスランド語では不定冠詞は発達していない）。これについては Nodes 5-7 の用例が見られた。次は Node 5 に該当する例である。

(27) [FO 79] *Og* *tá* *ið* *tú* *hevur* *uggað* *teg* - *ein* *uggar*
そして とき 君が もつ 慰める.PSTPT 君を 一.NOM 慰める.PRS.3SG
*seg* *altíð* - *[...]*
自身.ACC いつも
[FR 80] *Et quand tu seras consolé (on se console toujours) [...]*
[JA 169] 悲しみがやがて和らぐとき（和らがないなんてことはないよ）、[...]

Node 6 に該当する例は『星の王子さま』の翻訳に見当たらなかったため、ニュース記事から補っておく。

(28) *Ein* *skal* *ikki* *lúgva,* *[...]*
一 べきである.PRS.3SG ない 嘘をつく
「人は嘘をつくべきでない [...]」 (Føroyski portalurin, 2016 年 12 月 2 日)

次は Node 7 に該当する例である。

(29) [FO 12] *Og* *ein* *kemur* *ikki* *rættiliga* *langt, um* *ein* *gongur*
そして 一 行く.PRS.3SG ない 本当に 長く たとえ 一 歩く.PRS.3SG
*beint* *fram* ...
まっすぐ 前へ
[FR 9] *Droit devant soi on ne peut pas aller bien loin...*
[JA 27] 自分の前をまっすぐにといっても、そう遠くへ行けるものではない……

### 3.6. フェーロー語 *menn*「人」（複数形）

フェーロー語 *menn* は一例しか見つからなかったため、正確な用法の分布は現状では不明であるが、参考として挙げておく。Node 3 に該当する用例である。

(30) [FO 14] *Eg* *visti* *væl,* *at* *umframt* *tær* *stóru* *gongustjørnurnar*
私 知っている.PST.1SG よく こと の他に 定冠詞 大きい 惑星.DEF
*sum* *Jørðina, Jupiter, Mars og* *Venus,* *sum* *menn* *hava*
のような 地球 木星 火星 そして 金星 関係詞 人々.NOM 持つ.PST.3PL
*navngivið,* *finnast* *í* *hundraðtali* *av* *øðrum,* *[...]*
名付ける.PSTPT 存在する.PRS.3PL で 数百の数 の 他の

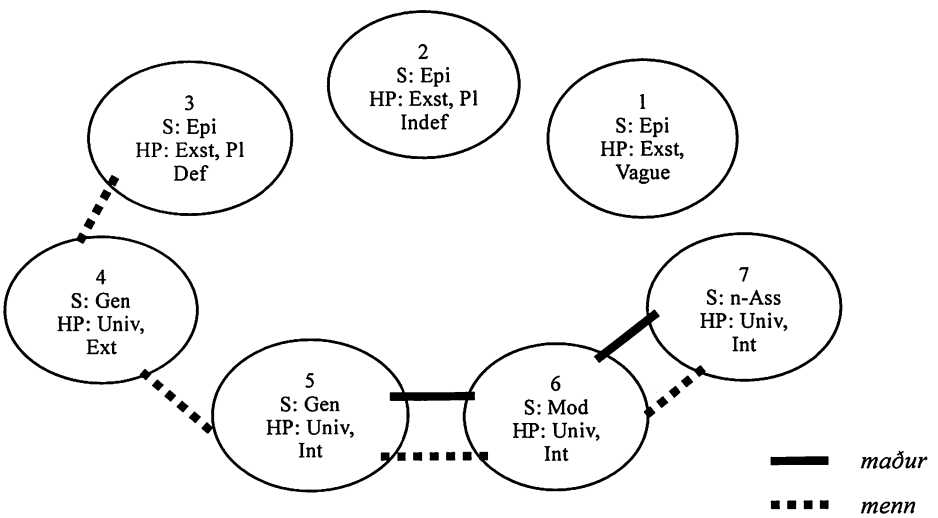
「地球や木星、火星、金星のような、人が名付けた大きい惑星の他に、他の何百という星が存在し、[...] ということを私はよく知っていた。」((15) 参照)

## 4. 意味地図による考察

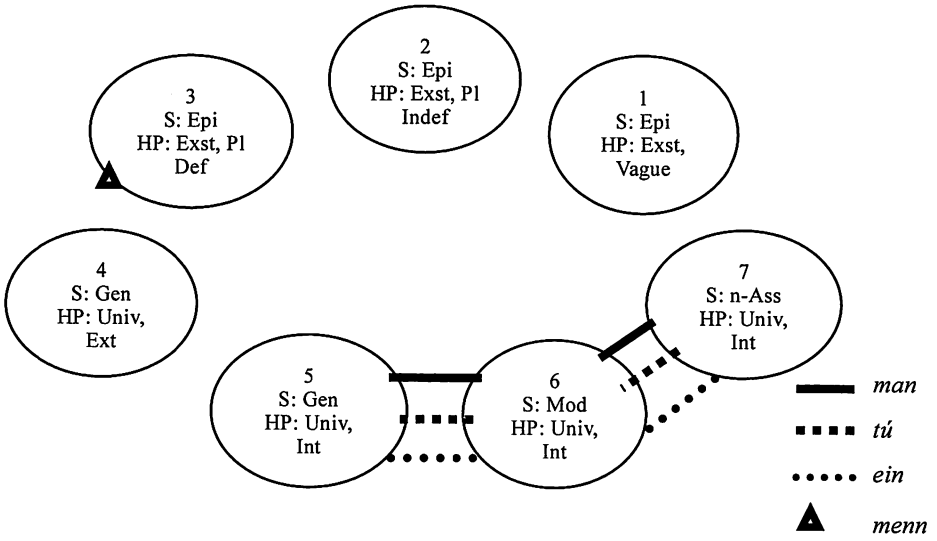
第 3 節で挙げたアイスランド語とフェーロー語の不定代名詞的名詞類の分布を Gast & van der Auwera (2013) の意味地図 (7) 上にマッピングしたのが (31), (32) である。

アイスランド語の *maður*（単数形）と *menn*（複数形）の分布で異なるのは、*menn* には Nodes 3-4 に該当する例があることである。Egerland (2003) は、スウェーデン語などスカンジナビア半島のゲルマン語の非人称代名詞 *man* は episodic use（特定の時間・場所で生じた事態）において、想定される動作主が単数の読みだけでなく複数の読みも可能であるのに対し、アイスランド語の不定の *maður* は単数の読みしか許されないことを指摘している。Gast & van der Auwera (2013) の意味地図上でいうと episodic use の Node 3 からさらに推移した外的視点の Node 4 と内的視点の Node 5 の間が境界になると思われる。つまり *menn* は episodic use で複数の動作主が想定される場合 (Node 3) に加え、外的視点を取る場合 (Node 4) に用いられ、そこからさらに全称的な用法の Nodes 5-7 へも広がっていると言える。ただし、*maður* は用法の広がりの点では *menn* より狭いが、表 (8) が示すように、不定人称文で用いられる頻度は高いようである。ただし、他の不定代名詞も含めて実際の言語使用における頻度分布を調べるのは今後の課題である。

(31) アイスランド語 *maður*「人（単数）」, *menn*「人（複数）」の意味地図



(32) フェーロー語 *man*「人」, *tú*「あなた」, *ein*「一人」, *menn*「人（複数）」の意味地図




一方、フェーロー語で興味深いのは、Nodes 5-7（アイスランド語 *maður* の領域と一致）で 3 つの不定代名詞類が競合していることである。地図上で重複する部分の使い分けの条件を探るのは今後の課題である。*man* は今回の意味地図上に示したよりも広い範囲に分布している可能性もあり、さらに調査を要する。*menn* は今回の調査では Node 3 の用法しか見つからなかったが、その分布を確認するのも今後の課題である。表 (8) に見る頻度では、二人称単数代名詞の *tú* を不定人称文で用いた例が突出して多いのが興味深いが、一作品の翻訳に基づく少数の例をサンプルとしているため、さまざまな場面での実際の言語使用における頻度分布を調べるのも今後の課題である。

## 5. おわりに

以上、『星の王子さま』アイスランド語訳とフェーロー語訳の、フランス語原文の *on* による不定人称文に対応する部分に現れたアイスランド語とフェーロー語の不定代名詞類の用法を Gast & van der Auwera (2013) の提案する分類によって整理し、その意味地図上にマッピングをすることで分布を検討した。その結果、アイスランド語とフェーロー語（およびスカンジナビアのゲルマン語）の不定代名詞類では、Gast & van der Auwera (2013) のいう Node 3 から Node 5 にかけての領域でそれぞれの形式の用法の境界が集中しているらしいことが判明した。言語間での、また同一言語内での不定代名詞類ごとの用法の分布を大局的に見る上で、Gast & van der Auwera (2013) の方法は有効と思われる。今後の課題として、第 4 節で述べたことに加え、今回は取り上げなかった両言語の非人称構文による（つまり代名詞類によるのではない）不定人称表現の種類と用法の広がりがどのようになって

いるかを明らかにする必要がある。

## ＜注＞

* 本研究は JSPS 科研費 17K02680, 18K00529 の助成を受けたものである。

1 両言語はいずれもインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派の言語である。アイスランド語はアイスランド共和国の公用語で、母語話者数は約 30 万人。フェーロー語はデンマーク領フェーロー諸島で話されている言語で、母語話者数は約 4 万 8 千人。両言語とも、名詞類には形態論的な格として主格・対格・与格・属格の区別があり（ただし、フェーロー語では属格が衰退しつつある）、名詞には接尾辞定冠詞のついた形と、つかない形がある。フェーロー語では不定冠詞が発達しているが、アイスランド語には不定冠詞はない。両言語とも、動詞の単純時制としては現在と過去の区別がある。

2 例えばドイツ語の次のような文：*Es wurde die ganze Nacht getanzt.* 'There was dancing the whole night long.' (lit.: 'It was danced the whole night long.') (Gast & van der Auwera 2013: 124)

3 Siewierska (2011: 80, footnote 13) は、この点は明らかでないと述べている。

4 例えばアイスランド語の不定の *maður*「人」が、フランス語原文で *on* を主語とするのではない文の翻訳として用いられている例は 1 つしかない。

5 Morgunblaðið はアイスランドの日刊紙。例文はウェブ版（https://www.mbl.is/）から採取した。

6 フェーロー語の *man* はデンマーク語の語法を取り入れたものと言われている（Lockwood 1977: 125, Giacalone Ramat & Sansò 2007: 117, footnote 19）。Barnes & Weyhe (1994: 203) はデンマーク語を経由したドイツ語からの借用と述べている（cf. Siewierska 2011: 85）。

7 Vísir はアイスランドの無料オンライン新聞（http://www.visir.is/）。

8 Føroyski portalurin は、フェーロー諸島のニュースその他の情報を集めたサイト（https://portal.fo/）。

## ＜略号＞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2 | 2 人称 (2nd person) | PL | 複数 (plural) |
| 3 | 3 人称 (3rd person) | PRS | 現在 (present) |
| DAT | 与格 (dative) | PST | 過去 (past) |
| DEF | 定 (definite) | PSTPT | 過去分詞 (past participle) |
| GEN | 属格 (genitive) | SBJV | 接続法 (subjunctive) |
| NOM | 主格 (nominative) | SG | 単数 (singular) |

## ＜引用テクスト＞（角括弧内は本稿での略号）

Saint-Exupéry, Antoine de (1971) *Le petit prince*. Boston: Mariner Books. [FR]

サンテグジュペリ、アントワーヌ・ド著、小島俊明訳注 (2006)『対訳 フランス語で読もう「星の王子さま」』東京：第三書房. [JA]

Saint-Exupéry, Antoine de (2015) *Tann lítli prinsurin* (Alexandur Kristiansen, trans.). Fuglafjørður: Egið forlag (2nd edition, 2nd printing). [FO（フェーロー語訳）]

Saint-Exupéry, Antoine de (2017) *Litli prinsinn* (Þórarinn Björnsson, trans.). Reykjavík: Mál og menning (originally published by Bókaútgáfa Menningarsjóðs 1961). [IS（アイスランド語訳）]

## ＜参考文献＞

Barnes, Michael P. & Eivind Weyhe (1994) Faroese. In: Ekkehard König & Johan van der Auwera (eds.) *The germanic languages*, 190-218. London: Routledge.

Egerland, Verner (2003) Impersonal pronouns in Scandinavian and Romance. *Working Papers in Scandinavian Syntax* 71: 75-102.

Gast, Volker & Johan van der Auwera (2013) Towards a distributional typology of human impersonal pronouns, based on data from European languages. In: Dik Bakker & Martin Haspelmath (eds.) *Languages across boundaries: Studies in memory of Anna Siewierska,* 119-158. Berlin: De Gruyter.

Giacalone Ramat, Anna & Andrea Sansò (2007) The spread and decline of indefinite *man*-constructions in European languages: An areal perspective. In: Paolo Ramat & Elisa Roma (eds.) *Europe and the Mediterranean as linguistic areas: Convergencies from a historical and typological perspective,* 95–131. Amsterdam: John Benjamins.

Lockwood, W. B. (1977) *An introduction to modern Faroese.* Tórshavn: Føroya Skúlabókagrunnur (3. printing).

Petersen, Hjalmar P. & Jonathan Adams (2009) *Faroese: A language course for beginners - Grammar*. Tórshavn: Stiðin.

Siewierska, Anna (2011) Overlap and complementarity in reference impersonals: Man-constructions vs. third person plural-impersonals in the languages of Europe. In: Andrej Malchukov & Anna Siewierska (eds.) *Impersonal constructions: A cross-linguistic perspective*, 57-89. Amsterdam: John Benjamins.

Siewierska, Anna & Maria Papastathi (2011) Towards a typology of third person plural impersonals. *Linguistics* 49(3): 575-610.